令和2年度　下松市立花岡小学校　学校評価書

校長　　堀 川 勝 祥

1　学校教育目標

『学び続ける子　心豊かな子　たくましい子の育成』

【めざす児童像】

【知】：学び続ける子
- ☆自分の力を知り、伸ばそうとする子
- ☆自分の考えをもち、みんなと考えを深める子

【徳】：心豊かな子
- ☆思いやり・助け合いの心をもち、行動できる子
- ☆ふるさとを愛し、美しいものに感動する子

【体】：たくましい子
- ☆めあてをもちがんばる子
- ☆進んで健康・体力づくりに励む子

【経営方針】

＜学び続ける子の育成＞
- ○基礎的な知識・技能を確実に習得して「できる」力を育てる。
- ○課題解決に向け、知識・技能を活用しながら学習を深める。
- ○学びを支える学習意欲・学習習慣・学習規律の確立に努める。

＜心豊かな子の育成＞
- ○思いやり・助け合いの心をもち、よりよく生きようとする態度を育てる。
- ○郷土を愛し、美しいものに感動する心を育てる。
- ○学級活動を核として、生徒指導、学級経営を充実する。

＜たくましい子の育成＞
- ○体力向上や運動習慣づくりに努める。
- ○家庭を巻き込んだ健康教育を推進する。
- ○めあてに向かい根気強く取り組む活動を進める。

＜組織の力・地域の力の結集＞
- ○プロジェクト部会、コミュニティ・スクールの機能を生かし、学校運営・学校支援・地域貢献を充実する。
- ○幼保小中高連携を推進し、学びと育ちのつながりを見通した教育を展開する。
- ○教育環境を整備し、安心・安全な学校づくりを進める。

2　現状分析（前年度の評価と課題を踏まえて）

【学び続ける子の育成（まなび）】

３年間、全校でフリートーク・クイズトークに取り組んだことは、児童の聞く・話す意欲の向上、授業での話合いの活性化などに加え、支持的風土のある温かい学級づくりにもよい効果をもたらし、一定の成果を得ることができた。また、教職員で研修や情報交換を定期的に行うことで、その目的や意義を共有することもできた。フリートーク・クイズトークは、家庭や地域にとっては活動や意義が少し見えづらいので、昨年度は参観していただく機会を設けた。参観の結果、概ね肯定的な意見が多かったが、目的や意義を１回の参観で伝えることには限界があった。今年度も各学級の実態に合わせて工夫を重ねながらフリートーク・クイズトークに取り組み、参観の機会を複数回設けることで、周知を図っていく。

児童の学ぶ意欲は、授業での様子から学校では比較的高いと捉えられる。しかし、家庭学習への取組については個人差が大きい。その意義や方法の家庭への周知についても改善の余地があると考える。学校での学びを充実させるとともに、家庭においても児童の意欲が持続するような働きかけが必要である。

【心豊かな子の育成（こころ）】

昨年度は道徳科の内容を家庭や地域に周知するために、学年だよりなどで内容を知らせたり、児童の意見や思いを紹介したりしてきた。また、道徳教育を進めていくという観点から、道徳科の授業を充実させてきたことで、授業時間内での児童変容は見られたが、普段の学校生活で互いの存在を認め合い、高め合う行動は多くは見られていない。

また、コロナウイルス拡大防止のための休校が長期化したこともあってか、「自分から」「目を見て」挨拶することができる児童が少なく感じられるなど、児童の挨拶に戸惑いが見られた。挨拶については、昨年度の「自分はしたつもりだが、相手には伝わっていない」という問題点を更に具体的な方策で改善に取り組んでいく必要がある。

【たくましい子の育成（からだ）】

昨年度から、体力の向上を図るため、外遊びを推奨してきた。体育委員会による全校遊びや、6年生児童による「縦割り班遊び」による異学年の児童が遊ぶことの素地はできている。その一方では、屋内での遊びや読書を楽しみたい児童もいた。山口県全体として柔軟性が低いことが挙げられており、本校でも柔軟性が課題となっている。

「ワ歯歯の日」の実施により、子ども達の歯を磨く習慣が徐々に身に付いている。しかし、歯の「表面・きわ」の細部まできれいに磨くことを意識して歯磨きができている児童は少ないと感じる。今後も生活習慣を含めた健康教育を進めていく上で、家庭と学校が連携していくことが不可欠である。

【組織の力・地域の力の結集】

地域の力を生かした教育活動の充実を図ることができた。地域でのボランティア活動等、児童の成長や活動の成果を発表する場をつくったことは、児童の自信になるとともに地域の喜びにもなった。今後も地域貢献の活動を増やしていけるとよい。

小中共通取組事項を本校のチャレンジ目標と関連付け、「挨拶」「靴揃え」「姿勢・返事」「時間厳守」を教職員が同一歩調で取り組むことができた。しかし、児童の姿に十分に表れていないため、継続して指導していく必要がある。また、保護者・地域への小中共通取組事項についての情報提供は十分ではないため、保護者・地域の方々の参加協力をいただくまでには至っていない。特に「あ・そ・ぼ・おの約束」については、地域や保護者にも周知していくとよい。

【心と体の安全・安心の確保】

「いじめは起こるもの」といった共通認識のもと、週末アンケートや、教育相談、教職員間の情報交換を中心に、いじめの「未然防止」「早期発見」に努めるとともに、いじめが認知された場合は、全校体制で「早期解決」に取り組むことができた。また、各学級が学級目標を意識した取り組みを行うこともできていた。

毎月の安全点検による危機の未然防止や、シェイクアウト訓練、ブラインド型訓練等の実効性を高める避難訓練、急病時の危機対応研修等、学校としての危機管理・危機対応能力を養う取組を行っている。ヒヤリ・ハット事案が起きた際は、全職員が情報を共有して再発防止に努めている。

【業務の改善】

コラボノートの利用や、通知表・指導要録等の諸帳簿の電子化を推進するとともに、会議等の時間短縮に取り組んだ。また、月に１回、定時で退庁する週を「プチ残業ウィーク」として実施する等、教職員のワーク･ライフバランスの意識を高める取組も行ってきた。教職員の効率的に業務を進め、早めに退庁しようとする意識は高まりつつある。

3　本年度重点を置いて取り組むべき課題･めざす成果

【学び続ける子の育成（まなび）】

フリートーク・クイズトークで一定の成果が得られたので、取組を引き続き行いつつ、児童が学校でも家庭でも主体的に学び続けることができるよう、学校や家庭での学びを支援する体制の構築にシフトチェンジする。特に家庭学習の質の向上に力を注ぎ、学習習慣の確立と学習意欲の持続、学ぶよさの自覚を促したい。さらに、学校での学びを充実させるために、できるだけ簡単な手続きで地域や家庭が学習支援できるような体制を構築したい。このように、学校や家庭、地域が一体となって学びを支えることができれば、児童は学ぶよさを実感するだけでなく、様々な人の中で学ぶよさを実感することもでき、主体的に学び続ける児童を育成できると考える。

【心豊かな子の育成（こころ）】

道徳科の学習も更に推進しつつ、児童が普段の生活の中で自己肯定感を高め、互いを尊重できる場面を生み出す方策として、挨拶の推進に取り組むこととした。本校児童に求められている「自分から」「目を見て」「元気のよい」挨拶が誰でもできるように、様々な働きかけを発達段階に応じて行っていきたい。そのために、児童が意欲をもって取り組むための方策や、児童自身が挨拶の良さを考え、意識して実践していこうという意識付けをしていきたい。

【たくましい子の育成（からだ）】

体力向上の取り組みは、体育委員会や6年生を中心に遊びの楽しさを伝えることを今後も継続していきたい。しかし、屋内遊びや読書の時間も大切にすることも伝えていきたい。

柔軟性が低い児童が多いため、朝の時間や体育の時間を活用して学校全体で柔軟性の強化に取り組みたい。

よい生活習慣づくりに向けて、今後も「歯ッピー・くーねる・のびスト」の継続をしていきたい。「仕上げ歯みがき」については、発達段階を踏まえて設定目標を考慮し、親子で一緒に取り組めるよう働きかけていきたい。

家庭と連携して、歯磨きの仕方を振り返り、歯の表面やきわに気を付けて歯磨きをして、意識の向上を図りたい。

【組織の力・地域の力の結集】

七夕飾り、昔遊びやクラブ活動等、地域の力を生かした教育活動を見直し・整理する中で、無理なく継続できるカリキュラムや仕組みづくりに努めていきたい。また、コミュニティ・ティーチャーの一覧表及び記録簿等をもとに、見直しを行っていきたい。

小中共通取組事項・本校チャレンジ目標である「挨拶・会釈」「整理整頓」「時間厳守」を教職員だけでなく児童自身にも意識させ、児童会等の児童の自主的な取組の中で、充実・発展できるよう工夫をしていきたい。また、小中共通取組事項・本校チャレンジ目標に関する情報提供を行ったり、「あ・そ・ぼ・おの約束」についても、地域や保護者に周知していきたい。

【心と体の安全・安心の確保】

児童が所属する学級を「いじめを生まない・いじめを許さない学級」にしていくことが最重要である。学級活動・道徳を中心として全教育活動をとおして、安心感・所属感・有用感・そして規範意識のある学級づくりを推進するとともに、保護者や地域とも共有できるように、情報発信に努める。

ヒヤリ・ハット事例をもとに、本校の安全点検・危機対応研修・避難訓練等の取組を見直し、危機管理に対する意識向上を図るための研修・訓練を行いたい。

【業務の改善】

業務や行事等の内容を精選するとともに、会議等の時間短縮と個別業務の時間の確保に努め、教職員一人ひとりが業務改善に取り組みやすい環境づくりを進める。また、教職員からの意見を吸い上げた業務改善プランを実行する等、教職員を主体者とし、一人ひとりの業務改善の意識を高められるようにしたい。

4　自己評価

評価領域	重点目標	課題解決に向けての取組（具体的方策）	評価基準（例） 4：十分達成　3：おおむね達成 2：やや不十分　1：不十分		達成度	重点目標の達成状況の分析（取組の適切さの検証）
学び続ける子の育成（まなび）	学ぶよさを実感し、主体的に学び続ける児童の育成	○家庭学習の重要性や意義、支援の仕方を定期的に発信し、周知を図る。 ○家庭学習カードの形式や内容を学校、家庭、地域で再検討し、よりよい形にしていく。 ○学習支援の必要な学年・教科・時期を年度末と年度初めに洗い出し、家庭、地域等、学習支援ボランティアを広く募り、児童へのきめ細かな学習支援体制を構築する。	4	アンケート項目のよくあてはまるの平均が９０％以上	3	「家庭学習応援プロジェクト」で、家庭学習の重要性や意義、支援の仕方、よい自主学習の紹介等を定期的に発信し、取組の方向性をそろえられるようにした。家庭学習カードの形式について、学校、家庭、地域で検討したことで、発達段階に応じたもの（項目の在り方、価値付けの仕方など）に変更していくことにつながった。学習に対する意欲向上と学習内容の定着を目指し、「コミュニティ・ティーチャー」を保護者から募り、各学年で授業を実施した。児童にとって身近な方が先生となり、教えて下さるのは効果的であり、きめ細かな指導にもつながった。 これらの取組を受け、アンケートの結果、教職員では「全て行った」の項目が大幅に増えており、教職員の家庭学習に対する意識が変化し、適切な価値付けや効果的な家庭学習の提示につながったと考えられる。児童では、肯定的評価に顕著な伸びは認められないが、家庭学習に対する意識の高まりは感じられる。今後も工夫を加えながら取組を継続し、中・長期的スパンで変化や実態を捉えていく予定である。保護者では、肯定的評価が上がっており、家庭学習参画への意識の高まりにつながったと捉えられる。 児童が、学校でも、家庭でも、主体的に学び続ける気持ちをもち続けられるようにするため、今年度の取組やノウハウを生かして、授業の質の向上、家庭学習充実のための手立てを来年度も工夫していきたい。
			3	アンケート項目のよくあてはまるの平均が７５％以上９０％未満		
			2	アンケート項目のよくあてはまるの平均が６０％以上７５％未満		
			1	アンケート項目のよくあてはまるの平均が６０％未満		
心豊かな子の育成（こころ）	ふれあいを通じて思いやりをもち、人と関わる子の育成	○各学年・学級での挨拶や会釈をしっかりするための具体的な指導（教員の手本、児童への賞賛、学年ごとの発達段階に応じた実践など）を積み重ねる。 ○学級会・代表委員会などを通じて、児童が挨拶の良さを考え、意識的に実践していこうという意識付けをする。	4	挨拶や会釈がしっかりできているという肯定的意見の平均が児童・教員・保護者・地域で９０％以上	3	今年度当初、児童は、休校の影響もあってか挨拶の声が小さかったり、顔を見て挨拶をしていなかったりしていた。学校生活に慣れてきてからは、元気に挨拶をしたり会釈をしたりするようになってきたが、個人差があり、地域や家庭ではきちんとできていないという問題点があった。そこで、代表委員会で決定した「学校全体で挨拶運動をすること」を中心に挨拶週間を設定し、挨拶カードを使って子どもたちや保護者によりよい挨拶の仕方について意識付けを行った。学級や学年でも全体のめあてや個人のめあてを決めて、活動に取り組んだ。更に高学年を中心とした挨拶ボランティアの活動を通して、自ら手本となるような挨拶をしようという意識をもつ児童も増えてきた。 このような取組の積み重ねにより、少しずつ挨拶の仕方は改善されてきている。しかし、教員や保護者、地域の方々には「もっと伝わる挨拶をしてほしい」「相手とコミュニケーションをするためという意識をもった挨拶をしてほしい」という願いがある。アンケート結果は、全体的に80％以上の肯定的な意見であった。86％の教員が、週3日から毎日、具体的な指導をしており、85％の児童が相手に伝わるように挨拶をしていると回答している。保護者は、児童の挨拶について肯定的意見が80％だが、「よくあてはまる」が20％で、挨拶の仕方について更によいものにしてほしいという願いをもっていると感じる。そのため、実践とアンケート結果を総合的に捉えて、評価を「３」とした。 今後も挨拶カードの内容を改善したり、活動を更に広げていったりする必要がある。そして、挨拶を通じたふれあいを通して人と関わりを深めることのできる児童を育てていきたい。
			3	挨拶や会釈がしっかりできているという肯定的意見の平均が児童・教員・保護者・地域で８０％以上		
			2	挨拶や会釈がしっかりできているという肯定的意見の平均が児童・教員・保護者・地域で７０％以上		
			1	挨拶や会釈がしっかりできているという肯定的意見の平均が児童・教員・保護者・地域で７０％以下		

5　学校関係者評価

評価	取組状況・達成状況に関する意見	次年度に向けた学校運営に関する改善意見
B	・内容の発信など、色々と意欲を高める工夫がされている。家庭学習に対し、児童及び保護者が教員の啓発に対し正面から対応していることがアンケートからわかる。 ・新型コロナウィルスへの感染予防のため、長期の休校期間があり、行事の変更やコマ数の調整を行ったうえで、教員の努力、児童のやる気、保護者の理解と協力により、成果を出したものと思う。 ・児童の自主学習ノートの利用は効果大であった。 ・学習支援ボランティアは、親が子ども（学校）に関わるよい機会になっている。	・人の自主学習ノートを参考にすることはより学びの参考になると思う。 ・コミュニティ・ティーチャーの取組は、継続してほしい。回数を増やしてもよい。あわせて、内容や項目の充実を願うところである。 ・継続が大切。より家庭学習に取り組めるよう改善する点を見つけてほしい。
B	・挨拶について、保護者の自分の子どもに対する満足度は低いとアンケートから読める。一義的には保護者の家庭教育の問題だと思うが、子どもに対し”なぜ挨拶が大切なのか”を理解、納得させることが必要と感じた。 ・公民館行事もほとんど中止となりましたが、放課後子ども教室等へ参加された児童は元気よく挨拶できました。 ・時々、朝の交通立証をしていますが、個人差もありますが、マスク越しの挨拶でモゴモゴ目を合わせていないなど、見受けられます。 ・家庭、地域でのあいさつをもっとできるようにしよう。 ・あいさつの重要性を伝えている点はよい。 ・登校、下校の時、元気よく挨拶をしてくれています。また、立哨に経たれている先生が率先してあいさつをされているので、こちらも朝から元気をもらっています。 ・親のあいさつのめあては親の反省としてあってもよい。	・朝起きたら家族間で挨拶するなど、家庭も巻き込んだ「あいさつ」運動をする。 ・育友会から、中学校との連携が大変良かったとのお話があったので、次年度もぜひ継続を。 ・学校内ではできる子が、地域ではなかなかできない子もいる。上級生がしっかりお手本を示してほしい。あいさつ運動をコツコツ積み重ねていってほしい。 ・あいさつの効果のPRをしてみてはどうか。 ・家庭、地域でのあいさつの活性化に力を入れてもよいのではないか。 ・不審者もいるのでなかなか達成させるのは難しいと思う。少なくともあいさつされたら、必ずあいさつを返すことを100％目標にしてはどうか？

4　自己評価

評価領域	重点目標	課題解決に向けての取組（具体的方策）	評価基準（例） 4：十分達成　3：おおむね達成 2：やや不十分　1：不十分		達成度	重点目標の達成状況の分析（取組の適切さの検証）
たくましい子の育成（からだ）	健康的な体づくりに根気よく取り組む子の育成	○運動意識を向上させるために体育委員会による遊び大会を継続的に実施したり、遊びの紹介をしたりする。 ○「縦割り班遊び」を実施し異学年での児童同士の交流を図ると同時に、体を動かす楽しさを体得させる。 ○「ジャックナイフストレッチ」や「花小ストレッチ体操」を朝の会や体育の授業に取り入れたり、家庭にも紹介して取組の投げかけをしたりする。 ○柔軟体操の必要性について児童に伝え、柔軟性向上のための意欲化を図る。 ○長座体前屈を学期１回測定し、自己の伸びを知らせることで、柔軟性向上を実感させ、根気よく取り組むことができるようにする。	4	3学期の計測時に記録が伸びた児童の割合が90%以上	2	体育委員会による運動遊び大会は実施できなかったが、業間時間や昼休みに定期的に遊ぶ時間を設定した。休み時間には積極的に外に出て「鬼ごっこ」をしたり「しっぽとり」をしたりと外遊びをする習慣が定着してきている。 「縦割り班遊び」は実施することができたが、戸外で活動することができなかったため、体を動かす楽しさを体得するまでには至らなかった。 毎日、「ジャックナイフストレッチ」をして柔軟性向上に取り組んできたが、正しい姿勢で行えず柔軟性の向上につながっていない児童もいた。 今年度は「花小ストレッチ週間」では、どの学年も平均して週３日以上ストレッチに取り組んでおり、柔軟性向上への意識は高まってきている。しかし、３学期の長座体前屈の計測結果では、１学期の計測時より記録が伸びた児童の割合が72%だった。そこで、来年度は「のびスト」など、習慣的に実施してる柔軟性向上の質を上げたり、体育の時間の準備体操の正しい行い方を指導をしたりして継続的に柔軟性の向上に取り組む中で「花小ストレッチ週間」などで意欲の向上を図り、柔軟性向上に全校体制で取り組んでいきたい。
			3	3学期の計測時に記録が伸びた児童の割合が90%未満80%以上		
			2	3学期の計測時に記録が伸びた児童の割合が80%未満70%以上		
			1	3学期の計測時に記録が伸びた児童の割合が70%未満		
	自分の歯を大切にできる子の育成（歯の正しい磨き方）	○よりよい歯磨き習慣を身に付けさせるために、「ワ歯歯の日」に「表面・きわ」が磨けているかを振り返る機会を給食後に設定する。 ○「歯ッピー・くーねる・のびスト」を通して仕上げ磨きのポイントを家庭に知らせ、親子で歯の健康作りの意識を高めていけるようにする。 ○歯垢染色剤を家庭で実施し、歯磨きの仕上げ具合を把握した上で歯磨きの仕方の向上を図る。	4	歯磨きの際に、「表面・きわ」を意識して磨くことができた児童が90%以上である。	3	今年度は、11月8日の「いい歯の日」に合わせて、「歯ッピーカレンダー」と共に歯垢染色剤を使った染め出しを行った。染め出しによって、磨き残しのある部分が目に見えて分かったので、児童に磨く際のポイントを意識させることができた。さらに、「げんきっこ」を通して、保護者へ仕上げ磨きの重要性を伝えることができたので、染め出しの取組は、次年度も続けていきたい。 保健委員会による放送や各教室への呼びかけにより、「ワ歯歯の日」には表面・きわをきれいに磨こうという児童の意識は9割と高い。しかし、アンケートの結果を見ると、常時きれいに磨けていると思っている児童は6割程度である。 今後、一人ひとりが「ワ歯歯の日」だけでなく、常に意識して歯磨きをするためには、声掛けの頻度を多くすることや染め出しの結果を基に磨き残しが多い部分を分かりやすく掲示すること、鏡の設置あるいは手鏡の持参を検討することが必要である。
			3	歯磨きの際に、「表面・きわ」を意識して磨くことができた児童が75%以上90%未満である。		
			2	磨きの際に、「表面・きわ」を意識して磨くことができた児童が60%以上75%未満である。		
			1	歯磨きの際に、「表面・きわ」を意識して磨くことができた児童が60%未満である。		

5　学校関係者評価

評価	取組状況・達成状況に関する意見	次年度に向けた学校運営に関する改善意見
B	・柔軟性であれ筋力アップであれ、正しいやり方で毎日継続することが重要である。その観点から（質問３）で、教員の実施回答が少し少ないように感じた。 ・コロナ禍での子どもたちのストレス、運動不足は、多少はあるように感じます。体を動かす取組は工夫をして続けていってほしい。（マンネリ化せず、あきのこないように） ・継続が力です。効果の高低を追求する必要があると考える。 ・ストレッチ週間は、家庭でも一緒に取り組めて楽しめた。	・家庭学習カードや授業カード？のようなものを使い、目標を決めさせてやらせるようにするのもよい。ただ、教員の負担が増えないようにする必要はある。 ・柔軟度を数値化して、目標値達成度が分かりやすいようにする。 ・ストレッチの有用性をもっと広報しては？
B	・テスターがよいきっかけとなり、よかったと思う。また、家庭での指導に役立った。 ・75%という評価規準の再考は、必要だと思う。 ・保護者が危機感を認識していることはよいこと。	・今後も継続していけたらよいと思う。 ・カラーテスターの複数回利用を考えてみてはどうか。 ・歯磨きをしないと口臭がすることを教えてください。

4　自己評価

評価領域	重点目標	課題解決に向けての取組（具体的方策）	評価基準（例）4：十分達成　3：おおむね達成　2：やや不十分　1：不十分		達成度	重点目標の達成状況の分析（取組の適切さの検証）
組織の力・地域の力の結集	地域の力を生かした教育活動の充実	○保護者・地域住民の参加・協力を得ての「ふるさとを愛する子どもを育てる教育活動」を各学年や各分掌で積極的に実施するとともに、記録を残し、無理なく継続できるようにする。	4	「ふるさとを愛する子どもを育てる教育活動」を年間計画以上、実施した。	2	今年度は新型コロナ感染拡大防止のため、計画している活動の削減や、内容を縮小しての実施にならざるを得ない状況となった。そのような中でも、地域の方々に連絡を取り、書面や図面での指導を受けたり、担任が聞いた話を伝えたり、できる限りの範囲で活動を行った。 さらに、来年度以降、従来通りの学習活動が行えるようになった際に、引き続き指導や協力を受けられるように、積極的にコンタクトを取ってきた。特に、コミスクコーディネーター（ＣＳco）は、ホームページに学習活動や生活の様子を掲載したり、公民館等に掲示板を間借りしてコミスクだよりや児童の作品を掲示したりするなどして、積極的に情報を発信してきた。
			3	「ふるさとを愛する子どもを育てる教育活動」を年間計画通り実施した。		
			2	「ふるさとを愛する子どもを育てる教育活動」を年間計画にあるものを削減して実施した。		
			1	「ふるさとを愛する子どもを育てる教育活動」を実施しなかった。		
	小中連携取組事項に基づいた教育活動の充実	○学級活動や児童会活動を通して、小中共通取組事項やチャレンジ目標、「あ・そ・ぼ・おの約束」を児童主体の取組に取り入れるとともに、学校の取組を情報提供し、保護者・地域から児童のよさや成長についての情報提供を受け、児童にフィードバックし、取組へ意欲向上を図る。	4	「挨拶」「靴揃え」「姿勢・返事」「時間厳守」について、望ましい例や、教職員自身が見付けた、または保護者や地域（または教職員）から得られた児童のよさや成長について1日2回以上伝えている。	3	各学級担任は小中共通取組事項を念頭に置き、チャイム前の着席や生活交通委員会による登校時のあいさつの呼び掛けなど、児童の発達段階に応じて指導を継続しており、その都度、児童のよい行いや成長の姿を評価してきた。児童は、その言葉を励みに自らの行動をよりよいものとしようと意欲を高めてきた。各学年の靴がきちんと揃っていることは、来校者からも高く評価されており、教職員の励みにもなっている。 しかし、学校全体でみると、まだまだ成長途上にある児童の姿も見られることから、花岡小学校の「あ・そ・ぼ・おの約束」とも関連付けながら、継続的な指導が必要であると考える。
			3	「挨拶」「靴揃え」「姿勢・返事」「時間厳守」について、望ましい例や、教職員自身が見付けた、または保護者や地域（または教職員）から得られた児童のよさや成長について、1日1回以上伝えている。		
			2	「挨拶」「靴揃え」「姿勢・返事」「時間厳守」について、望ましい例や、教職員自身が見付けた、または保護者や地域（または教職員）から得られた児童のよさや成長について、週１回伝えている。		
			1	「挨拶」「靴揃え」「姿勢・返事」「時間厳守」について、望ましい例や、教職員自身が見付けた、または保護者や地域（または教職員）から得られた児童のよさや成長について、あまり伝えられていない。		

5　学校関係者評価

評価	取組状況・達成状況に関する意見	次年度に向けた学校運営に関する改善意見
C	・コロナという制約のある環境の中で、教員（学校）はよくされたと思う。 ・放課後子ども教室で花小児童と一緒に遊んだり学んだりしました。児童のアンケートにあったように、80％ぐらいの児童が楽しく活動してくれたと思う。 ・公民館に学校の掲示物を出していただきありがとうございました。公民館祭りは中止しましたが、作品の展示には、多くの方が見に来られました。 ・コロナのため、なかなか計画通りに行かなかったのは残念。 ・引き続きコーディネーターさんの情報発信をよろしくお願いしたい。	・来年度も「放課後子ども教室」感染防止策を講じて実施していきます。楽しい経験を一緒にたくさんしていきたい。 ・次年度は、コロナの心配が少なくなれば、よりよい活動を期待したい。 ・花岡公民館の掲示板活用は評価できる。より一層の内容の充実を図られたい。
B	・小中連携がもっとあってもよいと思う。	・継続的指導をよろしくお願いいたします。 ・高学年の中学校生活、心構えを知る機会があればよい。 ・今年度はコロナで、年長児と小学生との交流ができなかったが、来年度はできることを期待している。

４　自己評価

評価領域	重点目標	課題解決に向けての取組（具体的方策）	評価基準（例） 4：十分達成　3：おおむね達成 2：やや不十分　1：不十分		達成度	重点目標の達成状況の分析（取組の適切さの検証）
心と体の安心・安全の確保	いじめを起こさない、許さない学級集団づくりの推進	○学級目標にもとづく取組や、学級生活づくりの話合い等、学級活動を中心として、安心感・所属感・有用感・そして規範意識のある学級生活づくりを推進する。そのために、学校だより、学年・学級通信を通して、保護者や地域へ発信する。	4	学級目標を意識した学級経営がされていると感じる割合が、８０％以上	3	質問６の児童と保護者のアンケート結果によると、肯定的な回答が８０％を超えている。しかし、教職員は、第1回では６０％以上が、第2回では７６％が、学校だよりや学年・学級通信等を通して保護者や地域へ学級目標に基づく取り組みを発信していると回答している。 これらのことから、学級目標を意識した学級経営がされていると感じる割合が、７０％～８０％と考えられるため、達成度を３とした。 今後は、安心感・所属感・有用感・そして規範意識のある学級生活づくりをよりいっそう推進するために、具体的且つ効果的に啓発できるように努力していきたい。そうすることで、保護者からの「よくあてはまる」の回答が多数を占めるようにしていきたい。
			3	学級目標を意識した学級経営がされていると感じる割合が、７０％以上８０％未満		
			2	学級目標を意識した学級経営がされていると感じる割合が、６０％以上７０％未満		
			1	学級目標を意識した学級経営がされていると感じる割合が、６０％未満		
	実効性を高める避難訓練･危機対応研修の実施	○ブラインド型訓練、シェイクアウト訓練、外部講師を招聘した訓練、緊急時を想定した引き渡し訓練等、実効性を高める訓練・研修を実施し、教職員の危機管理意識を高める。	4	2ヶ月に１回以上の訓練・研修を実施し、自身の危機管理意識の高まりを感じている教職員が８０％以上である。	4	ブラインド型訓練や、シェイクアウト訓練など、緊急時を想定した訓練を繰り返すことにより、児童の意識が高まってきている。また、教職員の危機管理に対する意識も高まってきているので、今後も継続していきたい。 アレルギーをもつ児童への対応として、医師による研修、保護者との面談などを行っている。これまでのヒヤリハット事案については、教職員で共有し、担任以外の誰でも対応できるようにしてきた。
			3	2ヶ月に１回以上の訓練・研修を実施し、自身の危機管理意識の高まりを感じている教職員が７０％以上である。		
			2	2ヶ月に１回以上の訓練・研修を実施し、自身の危機管理意識の高まりを感じている教職員が６０％以上である。		
			1	2ヶ月に１回以上の訓練・研修を実施し、自身の危機管理意識の高まりを感じている教職員が６０％未満である。		
業務の改善	教職員の業務改善に向けた意識の向上	○業務や行事等の内容を精選するとともに、会議等の時間短縮に努め、教職員一人ひとりが業務改善に取り組みやすい環境づくりを進める。 ○教職員からの意見を吸い上げた業務改善プランを実行し、一人ひとりの業務改善の意識を高める。	4	業務改善に向けて、具体的な取り組みを実行し、残業時間が、月４５時間に対し、下回った。	2	新型コロナの流行により、臨時の会議の増加や消毒作業等、例年にはない業務が増え、その対応に追われた１年であった。残業時間の増加は、効率的な働き方について各自が意識するきっかけにはなったが、改善にまでは至らなかった。 今年度、業務支援員が配置されたことにより、印刷や仕分け、学級業務の一部等を頼めるようになった。また、コミュニティ・ティーチャーやボランティアを募集し、学習や図書整理の支援をお願いした。今後は、今年の取組をさらに進めていき、教職員でないとできない仕事と外部に頼める仕事を区別し、時間と精神面でのゆとりを作っていくことが必要であると考える。
			3	業務改善に向けて、具体的な取り組みを実行し、残業時間が、月４５時間に対し、100%～150%だった。		
			2	業務改善に向けて、具体的な取り組みを実行し、残業時間が、月４５時間に対し、150%～200%だった。		
			1	業務改善に向けて、具体的な取り組みを実行し、残業時間が、月４５時間に対し、200%を超えた。		

５　学校関係者評価

評価	取組状況･達成状況に関する意見	次年度に向けた学校運営に関する改善意見
B	・いじめ事例を聞かないのでよいのではないか。	・いじめにつながる言動を、地域家庭でも分かるような指針があるとよいのではないか。
A	・（質問７）の結果を見ると、教員と保護者の評価差が大きいと思われる。もう少し学校から家庭に情報発信が必要かもしれない。 ・コロナ禍を逆に生かした取組がなされたようで素晴らしい。 ・考えながら実施されている点を評価する。 ・小さい頃からの訓練がいざという時に活きる。子どもの危機意識は低くても継続をしてほしい。	・できれば継続をお願いする。子どもの危機管理〇〇向上や対応力アップなど、親の責任である範囲が大きいので、保護者へもっとPRをするとよい。親が能動的に対応すべきことを認識してもらう取り組みが必要。 ・災害発生時の児童の対応や身の置き場などの指導も必要。そのためにも、データの蓄積が大切。連絡先の確認（複数）もしておくとよい。
C	・アンケートで200%以上や無回答が合計10%いるということは問題と言える。民間企業であれば、45H/月以上であれば、管理職に呼ばれて減らすための対策を提出させられます。 ・雑務をどんどんあぶり出して、支援員や地域に任せられるのであれば、振り分けていければよいと思う。 ・ありがとうございます。献身的な活動に感謝します。 ・改善はよいことです。働き方改革をして行くべし。	・会議の効率化など、工夫して残業を減らす努力が必要。 ・働き方の構造的な問題なのかもしれない。変えられるところを見つけて改善していってほしい。 ・先生方、早く帰ってください。学校からヘルプしてほしいことは、しっかり発信してよいと思います。

総合評価	学校関係者評価
B	良好な学校運営のもと、適切に教育活動が行われている。 学び続ける子の育成では、「家庭学習応援プロジェクト」と「コミュニティ・ティーチャー」の取組が始まった。家庭学習については、保護者の意識が高まっていることがうかがえ、成果につながってきている。「コミュニティ・ティーチャー」の取組も親が学校に関わる良い機会になっているため継続していくとよい。 心豊かな子の育成では、「あいさつ運動」に取り組んだが、学校とそれ以外での場所での児童の様子に違いが見られる。末武中学校と連携したあいさつ運動もよかったということから、地域連携とともに小中連携を視野に入れた展開をしていくとよい。 たくましい子の育成では、健康的な体のために、柔軟性を高める運動については継続して取り組んでいくことが大切である。しかし、その運動方法や取り組み方は検討する必要がある。歯磨きの取組については、カラーテスターの使用が効果的だったということなので、引き続き家庭への啓蒙を進めながら保護者・地域とともに充実を図ることを期待する。 今年度はコロナ禍のため、組織・地域の力を生かした教育活動を実施するには難しい状況であった。しかし、その中でも、ＣＳコーディネーターが公民館などに掲示スペースを確保するなど働きかけ、情報の発信を続けたことは大きく評価できる。来年度は、状況に応じて、可能な取組や活動を実施してほしい。心と体の安心・安全の確保についても、コロナ禍という状況の中で起こってはならない「いじめ」に対して、よく配慮・指導されている。避難訓練等についても、できうる方法を考えて実施されていることが分かった。今後も危機意識を高めて継続してほしい。 業務の改善については、アンケートからも、残業の多さについて対策の必要性を感じる。会議の効率化を図ったり校務を見直したりするとともに、地域に任せたり支援員の活用なども考えていくとよい。 保護者も地域住民も、教職員とともに、学び続ける子、心豊かな子、たくましい子の育成をめざしていきたい。

6　学校評価の総括（取組の成果と課題）

【学び続ける子の育成（まなび）】	【心豊かな子の育成（こころ）】	【たくましい子の育成（からだ）】	【組織の力・地域の力の結集】	【心と体の安心・安全の確保】	【業務の改善】
これまでの取組により、教職員においては、授業の質の向上に加え、家庭学習の出し方や価値付け方の工夫などの成果があったと考えられる。また、保護者においても、授業支援や家庭学習参画への意識が高まったと捉えられる。児童においては、学ぶよさを実感できている児童が増えていることから、学習への意識の高まりが感じられる。 課題として、児童がより一層学ぶよさを実感できるよう、よい家庭学習の仕方を児童自身が理解できるようにすること（与えられた課題を丁寧に行うこと、自主学習の質を向上させていくこと）が挙げられる。また、家庭学習カードの形式についても、児童の発達段階に合っていて、大きな負担なく取り組むことができるような形式にしていく必要がある。コミュニティ・ティーチャーについても、今年度の取組を基盤にし、年間を見通して計画的に運営することで、さらに有効活用できる仕組みを整えたい。	各学年・学級で、挨拶や会釈をよりよいものにするための発達段階に応じた指導を積み重ねてきた。具体的には、学級活動を通じた学級全体のあいさつ目標や、個人目標を決めたり、日々の指導で児童を賞賛したりした。また、代表委員会での話合いを通じて、「学校全体で挨拶運動をする」という目標を決め、児童が挨拶の良さを考え、意識的に実践していこうという意識付けを行ってきた。さらに挨拶週間を年2回行い、児童だけではなく保護者もめあてをもって挨拶に取り組めるようにしたり、挨拶ボランティアを募って高学年を中心によい挨拶の手本を示したりした。児童は挨拶をしっかりしていると感じているが、教員や保護者、地域の方々は「もっと伝わる挨拶をしてほしい。」「相手とコミュニケーションをするためという意識をもった挨拶をしてほしい。」という願いをもっている。相手意識をもった、より気持ちの伝わる挨拶で、人と関わろうとする児童を育てることが課題である。	体力の向上を図るため、業間時間や昼休みに定期的に遊ぶ時間を設定したことで戸外で遊ぶ習慣が定着してきている。今年度は山口県全体として課題である「柔軟性」の向上を図るために全校で毎日「ジャックナイフストレッチ」を実施したり「花小ストレッチ週間」を設定したりして、柔軟性向上に取り組んだことで意識の高まりは感じたが、正しい姿勢で柔軟をしたり、継続的に取り組んだりすることが困難な児童もいた。 「いい歯の日」に合わせて、「ハッピーカレンダー」や歯垢染色剤を使った染め出しを実施した。染め出しによって磨き残しが目に見えて分かったので、児童自身や保護者に歯の磨き方が十分でないことを再確認する良い機会になった。次年度も継続して継続して実施していきたい。	今年度は活動の削減や、内容を縮小しての実施にならざるを得ないような中でも、地域の方々に連絡を取り、書面や図面での指導を受けたり、担任が聞いた話を伝えたり、できる限りの範囲で活動を行った。さらに、今後、引き続き指導や協力を得られるように、ＣＳコーディネーターを中心に、ホームページに学習活動や生活の様子を掲載したり、公民館等にコミスクだよりや児童の作品を掲示したりするなどして、積極的に情報を発信してきた。 また、小中共通取組事項を念頭に置き、チャイム前の着席や生活交通委員会による登校時のあいさつの呼び掛けなど、児童の発達段階に応じて指導を継続しており、その都度、児童のよい行いや成長の姿を評価してきた。児童は、その言葉を励みに自らの行動をよりよいものとしようと意欲を高めてきた。	児童と保護者のアンケート結果によると、肯定的な回答が８０％を超えている。しかし、教職員の、学校だよりや学年・学級通信等を通した保護者や地域へ学級目標に基づく取り組みを発信している割合はやや低い。 コロナ禍であることから、例年以上に衛生面においては気を遣った。それについては学校関係者評価でも認めていただいているところである。緊急時を想定した訓練を繰り返すことによって、児童・教職員の危機意識が高まってきたことを感じている。	新型コロナの流行により、臨時の会議の増加や消毒作業等、例年にはない業務が増え、その対応に追われた１年であった。その一方で、定例の会議等は、事前の資料配布やかかる時間の申告などによって時間短縮を図り、その分、必要な議案にしっかり時間をかけることができるようになった。 働き方を考える上での目安とする時間外在校等時間月４５時間のラインを超える教職員は未だ多いことが課題である。

7　次年度への改善策

【学び続ける子の育成（まなび）】	【心豊かな子の育成（こころ）】	【たくましい子の育成（からだ）】	【組織の力・地域の力の結集】	【心と体の安心・安全の確保】	【業務の改善】
よい家庭学習の仕方を児童が早い段階で理解することができるよう、今年度より早い時期に自主学習の紹介を行いたい。また、今年度末に家庭学習カードの形式を再検討し、児童の発達段階に合ったものにすることで、より効果のあるカード（学びの振り返り、学びの蓄積、価値付けなどが見えるもの）としたい。コミュニティ・ティーチャーについては、各学年で授業内容や行事を洗い出し、年間計画を年度初めに出せるようにする。そして、実施時期が近づいてきたら、メールで募集をかけるというスタイルを定着させていくことで、見通しをもって計画・実行できるようにする。また、多くの保護者が参加しやすくするため、「コミュニティ・ティーチャー」という名称についても変更する方向で検討したい。 学ぶよさを実感し、主体的に学び続ける児童を育成するため、今年度の取組やノウハウを生かして、授業の質の向上、家庭学習充実のための手立てを来年度も工夫していく。	心豊かな子の育成を確かなものにするために、「挨拶を通して人との関わりを豊かにする」取組を継続していくとよい。引き続き、教員の育友会挨拶運動への参加や、学校全体での挨拶運動を進めていきたい。挨拶週間の設定の時期や、挨拶カードの改良（めあての立て方や振り返りの方法）など、見直しも積極的に行っていく。あわせて、学校運営協議会や保護者、地域に向けて情報を発信し、周知を図りたい。学校・家庭・地域が全体で挨拶運動を進めることで、人との関わりを深めることのできる児童が育つ環境となるであろう。	本校は柔軟性が低い児童が多いため、朝の時間や体育の時間を活用して学校全体で柔軟性の強化に取り組みたい。また、「花小ストレッチ週間」を継続して実施し、柔軟性向上の必要性について知らせたり、学年に応じて目標を設定したりすることで、継続的に取り組むことができるようにしたい。 よい生活習慣づくりに向けて、今後も「歯ッピー・くーねる・のびスト」や「歯垢染色剤」の実施を継続していきたい。「仕上げ歯みがき」については、発達段階を踏まえて設定目標を考慮し、親子で一緒に取り組めるよう働きかけていきたい。 家庭と連携して、歯磨きの仕方を振り返り、歯の表面やきわに気を付けて歯磨きをして、意識の向上を図りたい。	チャイム前の着席や登校時のあいさつの呼び掛けなど、児童の発達段階に応じて指導を継続しており、その都度、児童のよい行いや成長の姿を評価できるが、学校全体でみると、まだまだ成長途上にある児童の姿も見られる。このことから、小中共通取組事項の「挨拶」「靴揃え」「姿勢・返事」「時間厳守」について、来年度も、学級活動の内容や代表委員会等の議題として取り上げ、花岡小学校の「あ・そ・ぼ・おの約束」とも関連付けながら、子どもたちが課題に対して自主的・主体的に取り組めるような機会を設け、教職員の指導と併せて、取組の充実を図りたい。	今後は、安心感・所属感・有用感・そして規範意識のある学級生活づくりをよりいっそう推進するために、具体的且つ効果的に啓発できるように努力していきたい。そうすることで、保護者からの「よくあてはまる」の回答が多数を占めるようにしていきたい。 災害発生時の連絡先や避難経路など、計画された訓練を実施する上で必要なことを日頃から確認しておくことや、様々な想定で行った訓練の成果と課題を記録して蓄積していくなど、訓練の実施回数だけでなく、中身の充実を図っていきたい。	業務の改善については、何よりも教職員の働き方についての意識改革が大切である。毎月の時間外在校等時間を目安に、効率のよい働き方について全職員で協議し、アイデアを出し合って具体へとつなげたい。また、教員でないとできない仕事と外部に頼める仕事を区別し、時間と精神面でのゆとりを作っていくことが必要である。業務支援員、コミュニティ・ティーチャーや各種ボランティアの募集等を来年度も引き続き行い、さらに発展させていきたい。